

令和三年度 前期入試問題 解説

【五〇分・一〇〇点・詳細非公表】

【一】説明的文章（論説）

〈出典〉「コケはなぜに美しい」

初期の陸上植物の面影を残す植物のコケ。花を咲かせず地味な存在と思われがちだが、その清楚でみずみずしい姿は、「わび・さび」に代表される日本の美意識に深く関係し、生き方に目を凝らせば、環境に応じて変幻自在にスタイルを変える知恵が満載の、小さなコケの壮大な物語。

〈著者〉大石 善隆

静岡県浜松市出身。福井県立大学学術教養センター准教授。専門はコケ生物学。京都大学大学院農学研究科博士課程修了。農学博士。主な研究テーマはコケの生態。この専門を背景にして、コケから日本の文化や地球環境問題についても考える。

問一 漢字の読み書き

漢字は音読み・訓読みを確認して学習すること。あくまでどれも中学校までに既習の漢字。漢字の理解は文章読解の要。日々の学習で意識して取り組もう。

問二 論理的読解力を問う問題（同義）

都市においてコケが生える場所は「道端」「木の幹」「街路樹」などが例に挙げられ、そこに定着して育つには様々な困難があることが全文を通して論じられて

いる。その中でもコケにとって生長を妨げる要因は、四つめ形式段落「発芽直後の乾燥に弱い」などとあるように、「乾燥」であることがわかる。都市の環境とそれがコケに与える影響については六つめの形式段落に詳細に述べられており、「コケにとつての樹幹の環境は非常に厳しく」「風や大気にさらされている樹幹は乾燥しやすい」「コケは、今ある個体を維持するのがやつと」など、コケが乾燥する都会の環境下においては非常に生育し難いことが述べられている。よって、「厳しい都市の環境」とは特に「乾燥しやすい」ことがあげられる。問いの条件のもと、「乾燥しやすい環境」が正解となる。

問三 論理的読解力を問う問題（修辭）

傍線部②「助け合い」は直前の指示語「こうした」を受けている。指示内容は直前の一文の内容「コケの個体同士が寄り添ってクッションをつくり、水の保持力を上げている」ことである。コケが複数で存在することでお互いが生育できる状況を「助け合い」と表現している。この抽象的表現（比喻表現）を具体的に示したのが二つめの形式段落であり、いろいろな種類のコケが混在する具体的な説明がされている。その状況を成し得たのが「美しい友情のおかげ」とまとめている。

問四 語彙（慣用句）の理解

Aの直前の内容はコケのかたちに関する具体例が列挙されている。そのコケのかたちが様々であることから、千差万別

が正しい。残りの選択肢の四字熟語も確認しておきたい。

慣用句は習慣として長い間使われてきた言葉であり、様々な文章や会話の中で使われる。比喩的表現の一つでもあり、読み手に理解を促す重要な語彙知識であるので、正しい理解の為に慣用句の理解に努めよう。

#### 問五 語彙の理解

語彙の問題は辞書語彙を基本に、本文中での用いられ方を確認して答えよう。

③ 「しめたもの」は状態が良い方向に進んで喜ぶべきことの意味。よって答えはア。選択肢イ・ウ・エの語義はない。④ 「釈然としない」は疑いや迷いが晴れずにもやもやする様子の意。よって答えはウ。選択肢アと迷うかもしれないが、「苛立ちを覚える」の意味が不適。

#### 問六 論理的読解力を問う問題

空欄へ B へにたどり着く論理展開を確認する。へ B へを含む四つめの形式段落の展開を確認すると、木の幹にコケのマットができる↓このマットを足場に次々に他のコケが侵入してくる↓コケのマットの湿度はコケに都合が揃い↓すくすくと生長する↓へ B へと展開する。次々に他のコケが生長する条件がそろっていることから、最終的にはさまざまなコケがみられることになることがわかる。よってイが正解。

#### 問七 指示語の内容を問う問題。

指示語「こうした」は、五つめの形式段落の内容を指し、「生物同士の争い」を指している。「生物同士の争い」＝「容赦ない争い」であり、「容赦ない争い」は、「限られた資源をめぐる争い」であって「容赦ない争いを繰り返す」のである。文末表現に合わせるかたちに改め、限られた資源をめぐる争いとまとめる。

#### 問八 論理的読解の問題（文章整序）

へ C へは「前提として」に続く内容。植物としての大前提であるエ「光合成をしてエネルギーを得なければならぬ。」が正解。へ D へは「しかし」と逆接の関係でつながるため、光合成ができないという内容になる。よって、ア「暗い中で光を十分に受け取れない」が正解。続いて「効率よく光りを受け取るためには」とあるため、へ E へはウ「平たい扇のような形になって面積を広くするのが理想的だ」が正解。へ F へはその後に「乾燥に弱くなってしまつたためだ」につながる。よってその要因にあたるイ「平たくなればなるほど、まわりの環境と接する面積も広くなり」が正解。

文章を論理的に読むためには、主語・述語を意識することや接続語に注目し、段落ごとのつながりを確認すること、指示語の内容、言い換えや比喩などを確認しつつ読解し、筆者の主張を正しく理解する力をつけていく。何となくの読み方でない論理的読解方法には小学校から積み重ねてきた国語学習の基本が重要となるので丁寧に学習しよう。

## 【二】 文学的文章（小説）

〈出典〉「裸の王様」

子供たち相手の画塾を開いている「ぼく」の所へ、友人の紹介で大田太郎という小学二年生の少年が通って来る。まともな絵を描けない太郎の心を開かせようとする「ぼく」と太郎の交流を描く。

〈著者〉開高 健（かいこう たけし）

昭和五年大阪市生まれ。「裸の王様」で芥川賞受賞して以来、「日本三文オペラ」「流亡記」など話題作を発表。一九六〇年代になり、しばしばベトナムの戦場に赴く。その経験は「輝ける闇」「夏の闇」などに色濃く影を落としている。菊池寛賞、川端康成賞、日本文学大賞など受賞多数。

### 問一 内容理解の問題

「ぼく」は、画塾で画の技術を教えず、「彼らが自分で解決策を発見する」ことを手助けするという姿勢で子供と接している。子供の描いた電車の絵から、野球観戦に行く人を乗せた電車だったというストーリーを話すことをきっかけに、子供が自分の興味の世界を次々と語りだす。その瞬間を待っている。きっかけとなるストーリーを、「詩」や「童話」としており、それを作り出す「ぼく」は「詩人」や「童話作家」である。

選択肢アは「絵画に文学的な表現を取り入れ」が×。選択肢イは「ぼく自身が詩や物語をつくり」と「想像の世界を与えてあげる」が×。あくまでも子供の中に

あるものを引き出すためのきっかけとなる話であり、子供と関わりの深いものを見つけて話しているため、「ぼく」自身の創作ではない。選択肢ウ正解。選択肢エ「子供が忘れた体験」ではない、イメージが強まっていないだけである。

### 問二 文学的表現の意味

「筆を投げた」子どもとは電車を一台きり描いてそこで描くことをやめた子どものものである。その子どもは絵が嫌いであったり、技術が乏しいわけでも教育方針に反発しているわけでもなく、あくまでも自分の中にあるイメージに気づいていないだけのため、正解はイ。「膝をたく」は納得したり承知したときの心情をあらわす慣用語。

### 問三 慣用語表現の問題

Aは「口をすべらせる」にかかる。「口をすべらせる」は隠していたことをうっかり話してしまうの意。Bの「眉をしかめる」は心配事や不愉快だと感じたことをいう表現。

### 問四 内容理解（人物像と背景の理解）

「ぼく」が「大田夫人の調教ぶりに感嘆した」のは太郎の画塾での様子を観察しからのこと。ひとりではぼつんと床に座り、絵を描かない太郎に「泥遊びの快感で硬直がほぐれることもある」とフィンガーペイントをさせようと試みている。つまり、太郎の様子を「硬直」ととらえていることがわかる。

## 問五 慣用句の問題

「ぬき足さし足」は音をしないようにそつと足を上げたり下ろしたりして歩く様をいう。

## 問六 登場人物間の心情と関係

設問の指示により「中略」より後を点検する。はじめに「ぼく」が太郎を特別に外へ連れ出す場面が描かれるが、これは「中略」以前の太郎が母親の躰によつて硬直している状況を改善し、うまく絵画へ導いていきたい意図があることが分かる。遊びへいざなう「ぼく」に対し、太郎ははじめ画を描かなければならないと思っていたが、「ぼく」の提案にのり、嘘をついて遊ぶことを決めた後からは熱中して遊びはじめる。そんな太郎の姿を見届け、「ぼく」は太郎をひとりにしてその場を離れるが、そこへコイを逃がして悔しがる太郎がやつてくる。その様子とコイを捕まえようとする太郎の様子に熱気を感じる「ぼく」が描写されて本文を終える。これらの事柄からウを選択しよう。

## 問七 表現上の特徴

当てはまらないものは選択肢エ。本文全体を通し、情景描写は比喩を多用し、読者の想像をかき立てるものになっている。しかし、爆弾穴の描写は、破壊の跡が生命を育む場所に変化していることを示してはいるが、そこに皮肉の表現は見当たらない。

## 問八 文学史の問題

芥川龍之介の作品は「蜘蛛の糸」。「それから」は夏目漱石。「人間失格」は太宰治。「生まれ出づる悩み」は有島武朗。「山月記」は中島敦。

## 【三】 古典 (古文)

### 〈出典〉『使琉球録』

冊封使が帰国後、琉球出使に関する記録として刊行した『冊封使録』のはじまりと評価される作品。以後数多く刊行された『冊封使録』の内容はこの『使琉球録』に準じたものが多い。写本は冊封に関する事柄を記述した「使事紀略」、琉球に関する群書の異を正した「群書質異」、航海神である天妃の靈験を記述した「天妃靈応記」、そして琉球の方言を表記した「夷語」などからなる。

### 〈著者〉陳侃 (ちんかん)

陳侃は浙江省鄞県の人、尚清王の冊封正使として一五三四年(嘉靖十三年)に来琉。

## 問一 歴史的仮名遣い、現代仮名遣い

基本的にはこれまで学習してきた教科書や副教材に戻り、歴史的仮名遣いの特徴と現代仮名遣いとのつながりを確認してほしい。「ゐ」↓「い」、語頭でないハ行はワ行へ、「つ」は「っ」(促音)で発音表記されるため、組み合わせに注意しながら解答したい。

問二 基礎的な古語の理解

両語とも、教科書教材で学習した古文で学んだ古語の意味をもとに、本文脈(現代語訳含む)とのつながりを考えて解答したい。「遙かなり」は物理的・心理的に距離が離れているさま、「なほ」は副詞でやはりの意味。解答は「遠く隔たっている」、「依然として」が古語の意味と同義と判断できる。

問三 古典(古文)の特徴に応じた読解

古典は助詞や主語が省略されるのが多い特徴をもっているため、前後の論理を意識しながら補って読み進めよう。

問四 指示語、因果関係の読解

1 始まりから三文続けて台風暴雨のひどい様子が描かれ、港に停泊した冊封舟が流されたのではないかと心配する。その流れから人に「これ」を視せたとあるため、港口の船がその対象。

2 港口の船を視に行かせた理由は、端に「心配だ(から)」、主語は筆者、前提の修飾語は風雨がひどいこと、流されたことを読み取りたい。

問五 古典(漢文)に特徴的な表現

「いづくんぞ(安)」は分からなくてよいが、現代語訳↓解釈を参考に、これが反語であることを判断したい。

問六 指示語の解釈(複数情報間の論理)

「これ」の直前の一文に琉球王が法司官を派遣して琉球人と封船を守らせていることが書かれている。「これ」はこの内容かと思われるが、側近に「これ」を尋ねると、夜中からきていることを返答する。よって、「いつやってきたか」を尋ねていることが分かる。

問七 心情理解とその理由(要旨理解)

- 1 「嘆く」はここでは感嘆。感ずは2につながる。
- 2 要旨に関わる内容理解。
  - ①琉球の高官が自ら封船を守る指揮
  - ②本国の人と比べた琉球人の美德

問九 文章表現

「夷」は本文中では単に「外」の意味で用いられており、本文の内容からも差別的な意識はみられない。